

難波西鶴と海之道

【18】

森田 雅也

前回は「好色一代男」巻七の五に登場するヒジネスマンの話でした。いずれも米商人、もしくは海運、川運関係に携わっていたと考えられる人々でした。ここでもう一度、巻七の五の米商人世之介にこだわってみます。

本文には「出羽の国庄内といふ所へ下りて、米など調て、大坂への舟便もまはり遠く」という一文があり

ます。「大坂への舟便」とは、庄内の積み出し港酒田から大坂へ上る直接の舟便ルートです。西回り航路を指していることになりま

す。西回り航路開発は、寛文12(1672)年のことですから、天和2(1682)年刊行の『好色一代男』に載るとは、とても新しい話題です。

どう開かれた？

港から日本海の寄港地を経て、福井・敦賀港で積み直し、陸路琵琶湖まで運び、琵琶湖の水運を利用して淀川を経て大坂の北浜へ至るルートでした。

670)年、知恵と才覚だけで貧農から一代成功した富商河村瑞賢(1618~99年)に、幕府は奥州信夫郡の幕領米数万石を江戸に回漕を命じました。瑞賢はこの命令を機会に、従来の東北地方から江戸への廻米ルートが太平洋沿岸を南下し、銚子から川船で利根川・江戸川を経て江戸に達していたのを、新たに寄港地を整備し、房総半島を迂回して直接江戸へと入る幹線航路を開発しました。

西回り航路と西鶴文学との関係については、初回から取り上げてきました。旧来の敦賀・琵琶湖ルートと違い、大回りになります。陸路や川船などの積み替えがなく、料金が安くなることから、一気に利用頻度があがり、北前船の主流航路となります。

幕府は江戸時代初めから、日本各地の天領からの年貢米を江戸まで安全に運ぶ、廻米ルート確保を模索していましたが、寛文10(1

これが東回り航路ですが、その成功を評価した幕府は、さらに瑞賢に命じて、日本海を西へ航海し、下関から瀬戸内海に入り大坂に

達する西回り航路を開発させ、成功させます。庄内藩が西回り航路を用いたのは、『酒田市史改訂版』(1987年)によると延宝元年としますが、那代高力忠兵衛の建議により、廻米改革が行われ、蔵米の大阪回漕の経費削減を行ったという記録などからは翌年の延宝2(1674)年実施とした方がいいようです。

そうすると、『好色一代男』巻七の五は延宝2年以降が設定されている話となりますね。その意味については次回に続きます。

(関西学院大学文学部文学言語学教授)

西回り航路と東回り航路